The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	結果の二次的述語の拡張行為について
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	Osaka Literary Review. 1990, 29, p. 51-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25493
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

結果の二次的述語の拡張行為について

岡　田　禎　之

0. Introduction

二次的述語は，Halliday (1967) によって様態を表すもの (depictive) と結果を表すもの (resultative) の二つに分類されるが，両者が大きく異なる点として (2b, c) のような構造が許されるかどうかということが挙げられる。

(1) a. John ate the meat [nude]. (様態)
　　b. John ate the meat [raw].

(2) a. John painted the door [green].
　　b. Mary cried [herself sick]. (結果)
　　c. Mary cried [her eyes red].

(1a, b) や (2a) では，二次的述語の意味上の主語は中心の動詞の目的語として働いており，これに附随する形で述語が付加されている。このことは，述語を取り除いても文全体の文法性が変わらず，また文自体に意味の違いも認められないことから支持されるであろう。これに対して (2b, c) では，*herself* や *her eyes* は，*cried* という動詞の目的語ではなくむしろ *sick* や *red* といった形容詞述語の主語としての働きを持っていると考えられる。これは，(2′)のように述語を取り除くと文法性が変わることから支持されるであろう。

(2′) a. John painted the door.
b. * Mary cried herself.
c. * Mary cried her eyes.

反対に，様態の述語ではこの様な構造は許されない

(3) a. * John ate [himself nude].
b. * Mary cried [herself angry].

(ここでは，*nude, angry* という形容詞は結果でなく様態を表すものとする。)
様態の表現には，主文の動詞から θ 付与されない，二次述語専用の意味上の主語を設定することはできず，このような意味上の主語と独自の構成素を形成するとは考えられない。

ここで，Rothstein (1985) に従って一次的述語と二次的述語の違いを定式化しておくと (4) のようになる。

(4) a. X is a primary predicate of Y iff X and Y form a constituent which is either theta-marked or [+INFL].
b. X is a secondary predicate of Y iff Y is an NP theta-marked by a lexical head other than X.

INFL をもつか，θ マークされる構成素をなす場合，その主述関係は一次的であり，意味上の主語が，当該の述語以外の別の述語によって θ マークされるのが，二次的な関係であるとされる。これに照し合わせると，様態の場合は必ず二次的であるが，結果の場合は (2a) のような二次的なものと，それに加えて (2b, c) のような一次的なもの，というパターンが考えられる。何故 (2b, c) が一次的なのかについては，Yamada (1987) や都築 (1989) などに仮定されているように，結果の述語には RESULT という θ-role が与えられると考えられるからであり，(その根拠については後で

考察する)，それゆえ(2b,c)では [herself sick] などの主述関係をもつ構成素は θ マークされ一次的と見なすことができるようになる。[1)]

さて，少し観点を変えてこれらの構文の歴史的な発達経過を見てみることにする。

(5) a. Depictives—"Examples with adjectives as objective complements occur with some frequency in all periods."

b. Resultatives— "Examples of Old English verbs construed with a resultative predicate adjunct are not numerous."... In Middle English, the number increases, ... In Modern English the idiom is widely used with a great variety of verbs. (Visser 1963)

Visser によると，様態の述語は OE から Pres. E までほとんど変わらずにそのままであり（ここでは目的語が意味上の主語になるものだけを引用したが，(1a) のような主語に係わる場合も同様である)，これに対して結果の述語は OE 以降徐々に拡張していったものであると考えられる。詳しく見てみると，結果の述語の構文に用いられている動詞はその初出年代から見てみて，OE で 5 個，ME で20個，ModE 以降50個と増大していくことが Visser の観察によってわかる。それより大事な事は，(6) にあるように OE, ME では，この構文に用いられるものはほとんど他動詞であり，(2a) のような二次的な結果述語が用いられるに止まっていたようであるのに対して，(2b, c) のような一次的な結果の述語は，トマス・モアやシェークスピアの作品に認められており，主に ModE 以降に登場しているということである。[2)] このような拡張が，Visser の指摘する "widely used with a great variety of verbs" という事実に対して貢献したところは非常に大きいと考えられる。他動詞構文ばかりでなく，自動詞構文への拡張がこれで可能になったからである。

(6) a. OE—Awascan clane (wash clean), bindan orwigne (bind defenseless), feormian clane (cleanse clean), gescearfian smale (cut off small), gnidan smale (break small)

b. ME—beaten smal, chewen small, choppen small, dyen green, floberen foul (soil foul), grinden small, painten black.

c. Mod E—And cry myselfs awake? (1611年)

[They] drink themself sow drunk. (1522年)

Paulo, who had roared himself hoarse, ... (1797年)

weep our sad bosomes empty. (1605年)

まとめ直すと，結果の述語は(7a)から(7b)への拡張により生産性の高い表現となり，これに対して様態の述語は(7c)から(7d)への拡張はなく，OE から大きな変化もなく今日に至っていると考えられる。(ここでは PRO 定理を破棄し，Hornstein & Lightfoot (1987) に従い小節 [small clause] 分析の立場をとる。[3])

(7) a. John painted the door [PRO green].

b. John cried [himself hoarse]. (resultative)

c. Mary cried [PRO drunk].

d. * Mary cried [herself drunk]. (depictive)

では，何故この二つの構文にこのような違いが生じたのであろうか。ここではその問題について考えてみたい。

1. RESULT-role

まず一点目の違いは，先述の RESULT-role である。様態の述語も結果

の述語も，その小節内のINFLは空であると考えられているからこれらの二次的述語が一次的なものへ拡張する方法は一つ，主語とともに構成素をなし，それがθマークされるという方法である。結果の述語にRESULT-role が与えられると考える根拠があり，反対に様態の述語にそのようなroleを与える根拠が薄いのであれば，それが拡張への一つの引金となって両者の違いに現れたと考えることができるであろう。そこで，RESULT-roleを考える理由であるが，

(8) a. * He hammered the metal [PRO flat] [PRO wide].
b. He ate the meat [PRO raw] [PRO tender].

(9) a. I cooked the meal [PRO black]/[PRO to a cinder]/ *[PRO a cinder]/*[PRO blackened]/*[PRO burning].
b. The maid made the shirt starchy/* starched.
c. John came home [PRO sober]/[PRO in a high mood]/ [PRO a hero]/[PRO exhausted]/[PRO crying].

(10) a. John froze the ice cream [PRO solid]/[PRO hard]/ *[PRO soft].
b. She shot him [PRO dead]/*[PRO lame]/*[PRO wounded].
c. John ate the meat [PRO raw]/[PRO fully cooked].

(11) a. I rehammered the pan [PRO flat].
b. John re-examined him [PRO naked].
c. John re-examined him quickly.

(都築1989)

(8a)のように，RESULT は一文につき一つしか与えられないのに対して，(8b)のように様態の述語は複数生起することが可能である。θ-roleも唯一的に付与されるものである。

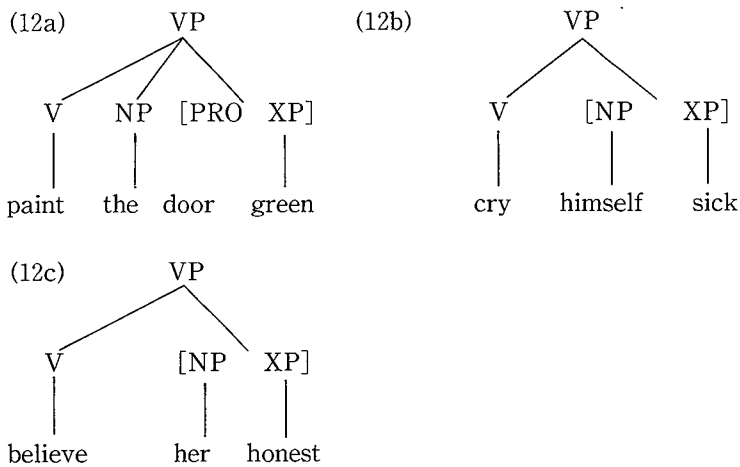
RESULT は(9a)のように AP と PP にしか許されない（これは，(9b)のように他の小節にも認められる制限である）のに対して，(9c)の様態の述語はそのような制限が認められない。つまり，範疇の制約がないわけで，動詞によって c-select される可能性が低いと考えられる。(10a)のように結果の場合，中心の動詞の意味との関連が強く，共起制限が強いうえに，(10b)のように矛盾しない解釈が可能である場合でも，生起できるものとできないものの差が明確である。一方，(10c)にあるように様態の場合は中心の動詞との関連は稀薄であり，共起制限が認められない。(11a)で，結果の述語は *re* 接辞の作用域内にあるが，(11b)における様態の表現はこの接辞の作用域内には入らない。これはちょうど，(11c)において単なる付加要素である副詞 *quickly* が *re* の作用域に入らないのと平行的に考えることができる。語順その他にも違いは認められるが，RESULT が唯一的に付与されること，強い共起制限があること，動詞の補部に入ると考えられる性質（*re* の作用域に入る）を有することなどから，結果の述語は VP 内で RESULT-role を付与されると想定されている。このような θ 付与の可能性の有無が，様態の述語と結果の述語の発展の違いに対して，一つの契機を与えることになったと思われる。

2. Structural factors

第二点目として，内部構造をみてみる。OE から Pres. E まで結果の述語の構造は基本的に変化していないと仮定すると，OE から存在していた二次的な結果述語は(12a)のようになり，動詞は PRO を統率する構造をとっている。[4]動詞は隣接する NP に格を付与するために，PRO に対してはもう格を付与することができず，この位置に音声形式をもった NP は出てこれない。

これに対して，拡張した構造である(12b)では，同じく小節は VP 内にあり RESULT-role を付与されている。ここでは，(12a)で PRO があった部分に NP (例えば himself) が許されている。これは，ちょうど ECM

動詞が小節をとる構造である(12c)と類似している。



ここで，ECM 構文一般に認められるように『補文にある時制要素をもたない命題に対して動詞が θ 付与する場合，随時これと平行して動詞は対格を付与する能力をもつ』と仮定してみる。[5] すると，(12c)では *believe* が小節に対して θ 付与するので格付与能力も有することになり，統率でき，かつ隣接している位置に格を与えることができ，*her* という NP が出てこれることになる。同様に，(12b)でも小節に対しては θ 付与されているから，NP が生起できると予測される。

ところで，補文に対する対格付与が随時可能である，とするのは *consider / believe* のように必ず付与される物もあれば，*expect* のように付与されてもされなくてもよい動詞もあるからであり，それぞれの動詞の特性によって選択性を持たせる必要があるからである。

(13) a. I consider [John to be sick].
b. * I consider [PRO to be sick].
c. I expect [John to go there alone].
d. I expect [PRO to be there by two].

(ここでは，PRO は統率されうるという立場をとっているので，補文標識が入らない (13d) は PRO を含む投射部分は CP でなく，(13c) と同様に IP であると仮定している。)

更に，もう一つ注目すべきことは，一次的な構造へ拡張した動詞群が，純粋に自動詞用法しか持たないものでなく，他動詞用法も確立している類いの動詞だということである。例えば，*roar* という動詞は，自動詞としては900年頃から用いられており，15 c 頃に他動詞として用いられている。1797年に，Paulo, who had roared himself hoarse, . . . という用例があるが，このような ECM 効果が成立するために，*roar* 自体の他動性（つまり，対格を付与する能力）が既に確立していたということは注目すべきであろう。

その他の動詞においても，ECM 効果によって拡張が行われる場合には，問題の自動詞は対格（同族目的語構文も，この一種とみなしておく）を付与できる他動詞用法をそれ以前（または，少なくとも ECM 効果が起こるのとほぼ同時期）に確立しているようである。一般の ECM 動詞，例えば *believe / consider* などについても，同様の観察が認められるため，この様な『他動性の確立』も拡張のための条件の一つとして考えるべきであると思われる。

この 2 つめの条件を設定すると，例えば，raising を起こす *appear / happen / seem* などについても考察が可能になる。これらは ECM 動詞と同じく propositional θ-role を付与するが，補文の主語位置には格付与できない動詞群である。それゆえ，補文から NP が文主語位置まで繰り上げられることになるわけだが，注目すべきことは，これらの動詞は対格を付与する他動詞構文を確立していないということである。[6] この点で一般の ECM 動詞とは決定的に違っているわけで，このような動詞を ECM とは異なる raising という方法での格付与という方向へと導いていった一つの原因であると考えることもできるであろう。

話をもとに戻すと，もともと PRO が入っていた位置に，格付与がなさ

れることによって NP が生じ，結果の述語の二次的から一次的なものへの拡張が行われたと考えられる。一次的なものへ拡張したといっても，[+INFL] の *that* 節や不定詞節に拡張したわけではなく，小節の構造のまま，ECM 効果によって拡張に成功したと考えられるが，これは PRO を想定した構造であれば充分予測可能であり，また最少限の構造的変化に止めることができる。

これに対して，様態の述語も同じく VP 内にあり (Roberts (1988) などの VP-constituency tests によって支持される) PRO は統率されていると考えられるが，先述の通りこの小節には θ 付与されていると考える根拠が薄いために ECM 効果が期待できず，二次的から一次的への拡張はなかったと考えられる。つまり，ここで仮定した ECM 構文成立のための 2 つの条件 (θ 付与と格付与の平行性と，他動性の確立) のうちの一つ目のものが満たされていない，ということになるのである。

3. Semantic and pragmatic factors

次に，意味的な側面を考えてみるが，それは様態の述語が二次的述語として補足的な付け足し要素にすぎない，ということと，これに対して結果の述語が二次的述語の段階にあっても単なる付け足し以上の働きをもっているということを示すことにある。前者は，ある状況が描かれるにあたって，その中心的な出来事と同時間帯に参与者に起こる付帯状況を描く述語である。その意味上の主語（つまり PRO のコントローラー）と様態の述語の関係を見てみると，この述語の付け足し的な傾向ははっきり現れていると思われる。

(14) a. John met Bill / someone [PRO drunk].
b. John will marry Joan / the girl his parents decide on [PRO young].
c. As for John, he met Mary [PRO angry].

(15) a. John met Mary [PRO drunk].
b. John met Mary [PRO drunk], [PRO angry] and [PRO dizzy].

(16) a. [PRO drunk], the man came up to Mary.
b. ? [PRO drunk], someone came up to Mary.

(14)のように定性や指示性を変えたり，左方転移による話題化をしたりすると，salient であると判断された要素が PRO のコントローラーとして選択されやすい。同様に，(15)は文主語の saliency のために，複数の PRO が並列して置かれた場合に，そのコントローラーとして主語が選択されやすくなるという例である。反対に(16)ではコントローラーであるべき主語の saliency が低いと判断され，文全体の容認度を落とす結果になっている。このような例を観察してみると，文中で salient であると判断される参与者に対して様態の述語は主述関係を結びやすいという傾向が一般に観察される。これは，単なる付加的な要素としては当然の現象であると考えられる。主述関係の決定権は，様態の述語の側にあるのではなく，主文の要素であるところのコントローラーに委ねられている。それだけ様態の述語は文中において中心的な要素とは考えにくく，純粋に付け足し要素的な性格をもっていると思われる。更に Rothstein (1985) は「様態の述語の意味上の主語は AGENT と PATIENT に限られる」という指摘をしており（同様の指摘は McNulty (1988) などにも見られる）主文に描かれる出来事における行為者 AGENT とその受け手 PATIENT という基本的かつ中心的と思える主題要素と主述関係を結ぶことが知られている。これは，先述の「saliency が高い要素に引き付けられる」という傾向とも整合するであろう。

これに対して，結果の述語は文脈に影響されることなく，THEME を唯一的にコントローラーとして選択する。また，先述の通り共起制限が強く，慣用表現的である。更に，動詞と結合して複合語を形成できる (17) など，

いずれを見ても単なる付け足しであるとは考えにくい。(反対に，様態の述語では（18）にあるように複合語は形成されない。)

(17) a. a clean-shaven man
b. the thin-sliced cheese
c. the short-cropped hair

(18) a. * a raw-eaten egg
b. * a rusty-bought tractor

[Kumagai 1989]

結果の述語は動詞との繋がりが緊密であり，Tenny (1987) も，この種の述語に関して，“more tightly thematically related to the verb than to the postverbal NP or accusative object”という結論に至っている。ここでは様態の述語の場合とは違って，コントローラーが小節を引き付けるのではなく，動詞と結果の述語の小節がコントローラーを要求しているわけであり，このような傾向が更に強まって結果の述語独自の主語を従える一次的述語の構文に発展したということも，あながち不思議ではない。見掛け上は，(1a,b) も (2a) も二次的述語でありながら，その意味上の主語との結び付き方には違いが認められるのであり，その違いが両者のその後の発展経過の違いにも影響を与えていると考えられる。

4. Conclusion

以上，様態の述語と結果の述語を比較しながら，前者が拡張したのに対して後者がそうならなかった理由について考えてみたが，それらは（i）RESULT-role 付与の可能性，（ii）意味上の主語をたてることのできる NP 位置が初めからあって，最初は PRO によって占められていたという構造的な可能性，(iii) 意味上の主語との結び付き方の違い，というものであった。[7] ここでは OE 期から現在まで一貫した構造を想定しているので，問題は残るかもしれないが，それでも上記の観点はすべて同一の方向性を

もっていると思われる。即ち，結果の述語が拡張していったのは極く自然な成り行きであり，様態の述語が二次的述語のままで止まっていることもまた自然な成り行きであるということである。

注

1）厳密には，都築（1989）は，一種の Goal role として RESULT-role をとらえている。

2）(2b,c)のような一次的述語としての結果述語構文は，Visser の Mod. E の用例50のうち13例に関して認められる。筆者が調べたところでは，一次的なものとして最も古い用例は1387年の *laugh oneself to death* というものである。これは ME 期に当たる用例であるが，これ以外には Mod. E 以前の用例は発見できなかったので，ここでは，これを例外的な事例として考えておきたい。

3）ここでは，AP / PP の specifier 位置に主語を仮定するのではなく，
[PRO INFL0 AP / PP] s (= IP)
と考えておく。

4）Government の定義については，Chomsky (1986) に従うものとしておく。
α governs a maximal projection XP if α and XP m-command each other, and if α governs XP, then α governs the specifier and the head X of XP.

5）内在的格については，その格付与と θ 付与との平行性が uniformity condition によって保証されている。ECM におけるような構造的格に関しても，形は異なっても，その格付与と θ 付与を連動させることは不自然な仮定ではないと思われる。

6）一時的に，又は方言として他動詞用法を持った動詞 (*seem*) などもあるが，結局この用法は raising verb に関しては定着していないようである。

7）結果を表す構文としては，*so that* 構文（OE 期から存在）や，不定詞構文（ME 期から存在）などの一次的述語構文が用いられ，反対に状況を表す構文には，分詞句や分詞構文のような二次的な構文が用いられやすい，ということも，結果と様態に用いられる述語の性質の違いを反映しているかもしれない。

References

Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris.

———. (1986). *Knowledge of Language : Its Nature, Origin, and Use*. Praeger.

Halliday, M. A. K. (1967). “Notes on Transitivity and Theme in English,

Part 1." *Journal of Linguistics* 3 : 37-81.

Hornstein, N & D Lightfoot. (1987). " Predication and PRO." *Language* 63 : 23-52.

Kumagai, A. (1989). " What Is Predication ? " *Metropolitan Linguistics* 9 : 76-101.

McNulty, E. M. (1988). *The Syntax of Adjunct Predicates.* Ph. D. Dissertation. University of Connecticut.

Mitchell, B. (1985). *Old English Syntax. I, II.* Oxford.

Randall, J. H. (1983). " A Lexical Approach to Causatives." *Journal of Linguistic Research* 2 : 77-105.

Roberts, I. (1988). " Predicative APs." *Linguistic Inquiry* 19 : 703-710.

Rothstein, S. D. (1985). *The Syntactic Forms of Predication.* IULC.

Sato, H. (1987). " Resultative Attributes and GB Principles." *English Linguistics* 4 : 91-106.

Tenny, C. (1987). *Grammaticalizing Aspect and Affectedness.* Ph. D. Dissertation. MIT.

都築雅子 (1989). 「結果の二次的述語とその拡張」 『英語教育』3, 4月号

Visser, F. Th. (1963). *An Historical Syntax of the English Language. Part 1.* Leiden.

Williams, E. (1980). " Predication." *Linguistic Inquiry* 11 : 203-238.

Yamada, Y. (1987). " Two Types of Resultative Constructions." *English Linguistics* 4 : 73-90.